

『本格小説』を読んだ記憶



makeanovel

上下巻組になった、それぞれ一冊ずつだけでもかなり分厚く、ずっしり重い単行本が二冊同時に出版された頃、私はお風呂と、ほんのわずかな仮眠のためだけに帰宅し、月に休みが一日あるかないかという生活を送っていた。好きでそんな生活をしていたの



か、今ではよく分からない。多忙な自分に酔っていたようでもあるし、仕事が面白かったのも事実だと思えるし、一旦乗るとなかなか降りられないベルトコンベアのようなものに運ばれていただけのようでもある。そんな日々の中で、その本の存在を知ってはいた。文芸書の新刊コーナーに二冊が表紙を見せて並んでいるのを目撃し、おそらくは手にとったこともあったはずだ。それでも、その生活の中に読書の時間を捻出できるとは思えず、買うことはないままその年が過ぎた。あるいは、その年が終わると同時にその生活は終了した。その年一杯で仕事はいきなりクビになり私は今度はひたすら暇な身分となった。あれだけ全てを捧げていた仕事をクビになるという事態に混乱したし悲しみもした。そして自分でスイッチをオフにしたのかされたのか、私はそれから昏々と眠り続けた。目を覚

ましている僅かな時間にトイレと一日一回の食事をし、また次の長い眠りに入った。

起きている僅かな時間にインターネットを徘徊するのが唯一の外界との接触になった。

定期的に読むようになっていったあるブログの筆者は前の年の私のように多忙な日々を送っていた。

かなり高度で専門的な知識を必要とする職に就き、実際活躍もしているようであるそのブログの主の生活が妙に気になって私はどんなに眠くても、1日1度はそこを訪れるようになっていた。

そのブログ主は、多忙な日々の合間に時間を見つけて、深夜のカフェなどで読書に耽っている。私は、一日20時間以上寝て朦朧とした意識の中で、いつしかそのブログはもう一人の私が書いているという妄想を抱いていたらしい（らしい、というのは今になってそう思い返すだけであり、当時の私の正確な心情を思い出すのは不可能だ）。

そのブログ主が読んでいる本をなるべく同じタイミングで読む、ということで行動をなぞって、そのことを証明しようとしていた。片方は仕事し、片方は深く眠りにつき、分担して生きているが、2人の頭脳は同じであらねばならない。だから本はなるべく同じものを読むべきだと。そしてブログ主が例の2冊組の『本格小説』を読み始めたとき、私もその2冊を注文した。ブログ主が今日はここまで読んだと書けば忠実に私もそこまでを読んだ。向こうがカフェで熱い紅茶を飲んでいると書けば私もなるべく同じ物を飲んだ。そんなふうにしてその上下巻を読み終えた時、私は自分がよう子ちゃんて相手が東太郎だと信じる事ができた。あるいは私がキャシーで相手がヒースクリフだと。E・Bの『嵐が丘』を下敷きにして書かれたという水村美苗著『本格小説』

が伝えようとしていることは、この小説を分かち合っ読んできた、インターネット回線の向こうのもう一人の私と、こちら側の私が、一心同体である、同じ魂を持つ者同士であることに違いないと。

当時住んでいた北陸の、冬の荒れ狂うような気候の中で、私はちょうど『本格小説』を体験し、同時に『嵐が丘』も体験し、半分眠るような生活をそれでも生きていた。ゴトゴトと風と雪の吹きつける音を聞きながら、起きている時間の可能な限り私はその本を繰り返し読み続けた。一種の鬱状態だったのであろうその時期、その読書体験がわたしを回復に導いたというドラマティックな影響はなかったが、夢うつ状態だったからこそ、その本がしっかり「わたしに」刻みつけられたということはあったのかもしれない。しかしそれもまたよくわからない話だ。私はその物語をひたすら「よく読んだ」としか表現しようがない。それは回数のこと指すし、精神的に深く物語に関わったことも、指すのだろう。

そのブログのほうは、ある時何の予告もなく消滅して、今ではそのブログを書いていた人物が本当に存在したのかもよくわからない。いや、ブログ自体が本当に存在したのかすら心もとない。いまだにその本が自分にとって役にたったということがあるのかわからない。ただ、ひたすら、よく読んだという、その深い深い体験が、あの凍える季節と眠りの狭間に、存在しただけだ。